

<ごあいさつ> 房州とイタリアを愛した画家・寺崎武男生誕 140 年・平和の祈り展

NPO 法人安房文化遺産フォーラム 共同代表 池田恵美子

2019（令和元）年のゴールデンウィークに、旧館山市立富崎小学校で開催した「海とアートの学校まるごと美術館」では、館山ゆかりの3人の画家（青木繁・倉田白羊・寺崎武男）を紹介しました。この模様は安房文化遺産フォーラムの YouTube から動画を見ることができます。



寺崎武男は1883（明治16）年3月30日に東京赤坂で生まれ、東京美術学校を卒業後、国の留学生としてイタリアに渡りました。ヴェネツィアの美術アカデミーで人体・彫刻・建築・版画の4科を卒業し、ドイツベルリンの大学で壁画科や宗教哲学科・歴史科を修めました。ヴェネツィアを中心に国内外をめぐり、フレスコ画やテンペラ画・エッチング・壁画・版画など様々な技法を学び、日本に紹介しました。特にルネサンス壁画の描画や保存方法を研究し、東西文化の融合を目指しました。

横山大観を中心に開かれた「^{ローマ}羅馬開催日本美術展覧会」（主催:イタリア政府/後援:大倉喜七郎）では、寺崎武男が通訳・コーディネーターを務めました。同時期に、観音を描いたテンペラ作品『幻想』は、ヴェニス・ビエンナーレ国際展で日本人初の入賞を果たし、イタリア政府の買上となりました。王立高等商業学校の日本語教師を務め、『日本のことば』などを発行しました。多年の日伊交流に貢献した功績から芸術名誉賞はじめ、

イタリア国王や政府からコメンダトーレ賞など多数の勲章を授与されています。

また、留学初期に出会った『天正遣欧使節』の行跡に感銘を受け、16世紀に日本から海を渡り、ローマ法皇に謁見して外交を果たしながらも、禁教から鎖国へ向かう時代に翻弄された少年たちの姿を後世に伝えようと、生涯にわたりをこのテーマを描き続けました。

一方、日本国内でも第11回文展で入選したフレスコ画『飛鳥朝の夢』はじめ、精力的に作品を製作しています。テンペラ画『黄帆船図』は大正天皇の病室に飾られ、崩御後は東京帝室博物館の買上げとなり納められました。

創作版画協会やテンペラ画会、壁画協会などの設立に関わり、東京大学病院や日本医師会館、目黒サレジオ教会などに壁画を描きました。

明治神宮奉賛会より絵画館開設のために壁画の調査を依頼されて再渡欧し、イタリア各地で模写をしながら画材や画質の研究をし、7回の報告書を提出しています。聖徳記念絵画館には『軍人勅諭下賜ノ図』が納められています。

早くから法隆寺の壁画研究に取り組み、防火設備のないことを危惧する論文を大正期に書いています。後に、彼の懸念どおり火災が起きて金堂壁画が焼失してしまいましたが、寺崎は9年がかりで法隆寺輪堂（旧経堂）の壁画を描き上げました。

- 【目次】
1. <ごあいさつ> 池田恵美子
 3. 年譜
 5. 履歴書
 6. ファミリーヒストリー：家系図
 7. <イタリア図書> 寺崎裕則「“幻”の画家 寺崎武男伝」
 12. <作品調査報告> 尾形純「多彩な支持体を用いた絵画技法と修復」
 15. <講演レジュメ> 石井元章「日伊交流史における寺崎武男」
 17. <調査報告> 愛沢伸雄「手帳や書簡から見える寺崎武男の世界」
 31. 法隆寺の壁画/管主・佐伯定胤上人との交流
 35. <家族との手紙> 次兄 熊雄/母 セツ/長兄 渡
 37. <友人との手紙> 呉建/大類伸
 39. <友人との手紙> 南薫造/平井武雄
 40. <弔辞> 大類伸「寺崎君の夢」
 41. <回顧展メッセージ> 三島由紀夫
 42. はるかなるイタリア/ツアーガイドのご案内
 43. 戦後80年企画 ~ 寺崎武男 平和の祈り展



塑像『自由の女神像』

ルネサンスの壁画を研究した寺崎の作品は、画面の対角線の7倍離れた距離から見ると焦点が合い、奥行きや立体感を感じるといいます。

海外で高い評価を得て、日本美術史にも大きな影響を与えましたが、あまり知られていない“幻の画家、です。親交のあった三島由紀夫は、「無理解と孤立には少しも煩はされずに、悠々と、晴朗に、芸術家たるの道を闊歩していた。あくまで走らず、跳ばず、悠揚たる散歩の歩度で。氏こそ、真の意味で、芸術家の幸福を味わった人ではなからうか」と回顧展にメッセージを寄せています。

館山には、美校の師でありイタリア留学の先輩である彫刻家・長沼守敬が先に移住していました。彼を慕って訪れるうちに、館山の西ノ浜に別荘を建て、やがて定住しました。房総の神話を多く描き、安房神社や布良崎神社、下立松原神社などに奉納しています。

東京女子美術学校洋画科主任を2年務め、1949（昭和24）年から千葉県立安房高校の講師となり、若者たちに情熱あふれる美術指導を受けました。兵藤益男校長の理解ある支援のもと、テラコッタ（土焼）で『自由の女神像』を制作しました。生徒も教職員も「まるで外国のようだ」と驚いたといえます。翌年の校長交代に伴い取り壊しが命じられたものの、懇意にしていた千倉の七浦中学の栗原幸太郎校長の配慮で移転し解体はまぬがれました。しかし数年後、残念なことに側溝工事の重機で破壊されてしまったとのことでした。

また、安房高校では修学旅行で法隆寺に立寄り、制作中の壁画を見学した生徒たちもいたようですが、残念ながら現在は公開されていません。

NPO 法人安房文化遺産フォーラムでは、多数の作品とともに2,000枚におよぶハガキと数十冊の手帳やスケッチ帳等を、三男の寺崎裕則・由希子夫妻より托され、資料の分類整理・解析調査に取り組んできました。家族や友人と交わしたハガキの解読は530枚にのぼり、国際的に活躍した寺崎家のファミリーヒストリーや壮大なネットワークが見えてきました。

寺崎家は儒学者の渡辺華山と交流があったといわれ、祖父・助一郎は幕末に長崎奉行の役人として外国要人の通訳に従事しました。父の遜は英国留学で学んだ電信技術を全国に広めた人物のひとりであり、後に山縣有朋の洋行随員や山縣内閣総理大臣秘書官まで務めましたが、武男の美校入学直前に亡くなっています。長兄の渡は渡欧留学で林業を研究した林学者で、「寺崎式間伐技術」を考案しました。次兄の熊雄は弁護士になりました。母セツは夫亡きあと、武男の進学・留学を支えたゴッドマザーです。セツの実家松澤家も、金融業・政治家・弁護士、そして一高水泳部から極東金メダリストや五輪監督となった松澤一鶴などを輩出しています。

寺崎の友人もそうそうたる顔ぶれです。城郭研究やルネッサンス史の第一人者で歴史学者の大類伸。何度もノーベル賞候補にあがった医師であり、文展帝展に7度も入選した画家の呉建。美校の同期で、ロンドンに学んだ南薫造やニューヨークに学んだ平井武雄。フランス文学者で美術研究に造詣が深く、松方コレクションのアドバイザーとなった成瀬正一・・・などなど。

こうした家族や友人らと交わした書簡は、互いへの尊敬と芸術への情熱にあふれ、西洋画の研究に強い影響を受けたであろうと思われるバッグボーンが読み取れます。

そこで、館山市立博物館の「生誕120年記念展」から20年を経て、安房ゆかりの先人を顕彰し、調査研究を報告する機会として、2023年に「房州とイタリアを愛した画家・寺崎武男生誕140年」シンポジウムを開催しました。ご尊父の顕彰を見届けるかのように、4月7日寺崎裕則氏が旅立たれました。感謝とともにご供養申し上げます。

2025年は目黒区美術館で開催の「遙かなるイタリア 川村清雄と寺崎武男展」に作品や資料の提供を協力するとともに、館山でも「戦後80年企画～寺崎武男・平和の祈り展」を開催いたします。これに合わせて、本誌の内容を充実し改刷・上梓するはこびとなりました。



『遣欧使節ヴァチカンへの行列』

6曲屏風 鳥ノ子和紙・テンペラ 1917年 星野画廊蔵



『ヴェネツィアの歓迎～レデントーレの祭』